

吉田、澀川等は、天學測量分野宿星の順環、日月交會盈縮の事を、渾象玉機を以て是を測るを業とし、世々子孫に傳へて世職とす、今は天學曆作等も精微となり、天文屋敷にて出役も多く、其理を談ず、蘭人の說等を以て、宿星の伏中を察し、清朝より渡る處の曆象大成杯を以て、其理を説き、仰觀俯察して測量す、是を以て天學は彌備れり、當時は吹上御庭、中觸の御茶屋前に、新天文臺を御修營有りて、奥向の衆掛りあり、東御輪見處御學文處出來たり、○中

天文方改方御役料拾貳俵 同下役御褒美銀五枚 同出役三人扶持

何れも天文屋敷へ勤て、吉田、澀川兩家の手附として、天文曆作の測量分野を以て業とす、何れも在勤有之、

〔元治元年武鑑〕天文方淺草鳥山路金之丞 天文足立左内九段上澀川孫太郎 父金之丞見習山路一郎

〔觸留三十八〕申○萬延元年 閏三月廿一日、紀伊守殿御渡、向方より寫差越、

町奉行 江 覺

天文曆算、世界繪圖等板行相願候者は、天文方之内江、草稿差出、蘭書翻譯、蘭方醫書等之儀は、天文方山路彌左衛門方江、草稿差出、任差圖候様、弘化二巳年相觸候處、蕃書調所御取立相成候付而は、向後天文曆算は是迄之通、天文方江、草稿差出、世界繪圖、蘭書翻譯、蘭方醫書等は、蕃書調所江、草稿差出、任差圖、彫刻出來之上、一部宛改受候所江、相納候様、向々江、可被相觸候事、

閏三月

〔日本書紀推古二十三年〕十年十月、百濟僧觀勒來之、仍貢曆本及天文地理書并遁甲方術之書也、是時選書生三四人、以俾學習於觀勒矣、○中 大友村主高聰學天文遁甲、○中 皆學以成業、

傳人習